

都市・農村協働型河川環境再生活動に関する基礎的考察—沖縄島北部地域を対象として—

琉球大学 正会員 ○神谷 大介
 琉球大学 森田 浩行
 琉球大学 正会員 赤松 良久
 沖縄県環境科学センター 宮良 工

1. はじめに

沖縄県は 1972 年の本土復帰以降、急激な自然・社会環境の変化を伴って他都道府県と同程度の生活ができる地域社会を築き上げてきた。これにより、物質的な豊かさはもたらされてきたものの、身近な自然環境を顧みることなく破壊と汚染を繰り返してきた。特に沖縄島はこの環境破壊が顕著である。この中で比較的自然環境が残されているのがヤンバルと呼ばれる沖縄島北部地域である。しかしながらこの地域はこの島の水源地であり、南部地域の経済活動を支えるために、数多くのダム開発や取水施設が造られてきた。この地域の河川には、環境省のレッドデータブックで絶滅危惧ⅠA類にランクされているリュウキュウアユが多く存在していたが、環境悪化によりこの島では 1980 年代に絶滅した。

近年、リュウキュウアユの放流や河川の自然再生への取り組みが、地域住民主体や参加型によって行われてきている。しかしながら、この地域の集落の多くは過疎・高齢社会であり、限界集落に近い状況である。従って、河川環境の保全や再生は地域住民によって行われるべきであるという考え方もあるが、この地域の住民だけで行うことは困難であると考えられる。

以上の認識のもと、都市生活者と農村生活者との交流を通じた河川環境マネジメントのための第一歩として、本研究ではヤンバル地域でも都市域に近い源河川利用者と沖縄島中南部で生活する大学生を対象としたアンケート調査を実施し、この可能性について検討する。

2. 本研究の位置づけと方法

都市・農産漁村の交流や多地域居住の推進により農産漁村の活性化を目指す取り組みが各地で行われ

キーワード：生活者参加、河川環境、過疎地域

連絡先：〒903-0213 沖縄県西原町千原 1 琉球大学工学部環境建設工学科 TEL：098-895-8653

てきている。交流に関する取り組みの多くが、田舎生活や農業の体験、交流施設における特産物の販売といった経済的活性化を主目的としたものが多い。また、棚田のようにその文化的景観としての価値が認識されてきているものに対しては、オーナー制度等による取り組みもなされてきている。これらより、都市生活者には田舎と呼ばれる地域や自然環境の中での活動に対するニーズはあると考えられる。

また、近年、見えざる資本としてのソーシャルキャピタルが注目されてきている¹⁾。様々な定義があるが、社会的つながり（ネットワーク）、信頼、規範を含み、協力行動を推進し、共通の目的と相互の利益を実現するために貢献すると考えられる。

本研究は、ヤンバル地域の源河川利用者および都市生活者の中でも時間的余裕があると考えられる大学生対象としたアンケート調査を実施し、過疎地域における河川を対象とした都市・農村協働型という橋渡し型（bridging）ソーシャルキャピタルによる環境の保全・再生活動の可能性について検討する。

アンケート調査の概要を表 1 に示す。

表 1 アンケート調査概要

調査対象	利用者	大学生
期間	2007 年 7・8 月	2007 年 12 月
方法	直接面談	留め置き
サンプル数	196	120

3. 河川利用者アンケート結果とその考察

回答者属性は、職業別には、学生 45 人、就業者：77 人、主婦 49 人、その他 8 人であり、性別では男性 95 人、女性 98 人である。利用状況は、家族グループが約 6 割、友人グループが約 3 割、その他が 1 割である。子どもを連れた家族の利用が多い河川である。また、整備された広場にはほとんど人がおらず、瀬と淵がある場所に集中していた。

表 2. 河川への要望と参加意思

要望	源河川参加	地元で参加	参加意思なし
現状維持	24	47	14
生物増加	18	38	3
人工物増加	20	64	16

表 3. 源河川に対するイメージ

項目	現状維持	生物増加	人工物増加
水がきれい	4.58	4.49	4.55
水量が多い	3.77	3.60	3.68
魚が多い	3.10	2.59	2.84
虫が多い	3.28	2.97	3.16
エビやカニが多い	2.95	2.61	2.84
鳥が多い	3.07	2.81	2.86
風景や景色がよい	4.42	4.35	4.31
危険を感じない	4.00	3.68	3.81
自然的な感じ	4.42	4.31	4.39
すっきりしている	4.00	3.97	3.91
居心地がよい	4.55	4.50	4.52
全体的に満足	4.69	4.58	4.53
ゴミが少ない	3.94	3.63	4.00
いやな臭いがしない	4.54	4.40	4.61
河川に近づきやすい	4.10	4.22	4.10
個性的	3.71	3.83	3.67
変化に富んだ感じ	3.67	3.78	3.69
眺めていたい	4.34	4.38	4.15
親しみやすい	4.40	4.47	4.37
源河川が好き	4.78	4.82	4.62

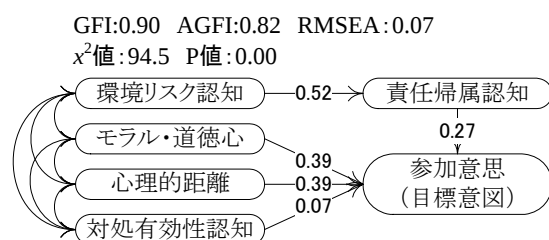


図 1. 参加意思形成の因果関係

まず、「この川がどのようなになって欲しいか」という問い（8選択肢、複数回答）に対し、最も多い回答が「現状のまま」91人、次いで「トイレ」86人、「生物が多い川」51人、「駐車場」44人となった。この結果を「現状維持」、「生物増加」、「人工物増加」と分け、河川の保全・再生活動への参加意思を訪ねた結果を表2に示す。これより、全体的には地元の川で参加したいという希望が多くなっている。また、生物の増加を望んでいる人の3割が源河川での活動への参加意思を示した。

源河川に対する5段階評価の結果を要望によって分けた3グループ毎に表3に示す。これより、全体的に生物の増加を望んでいる人の評価は低くなっている。しかしながら、川に対する親しみや好感を持っている。換言すれば好きだからこそ厳しい評価を

しているとも考えられ、このような人が実際に活動へ参加する可能性が高いと推察される。

4. 大学生の参加意思形成に関する分析

「ヤンバル地域の河川の保全・再生活動に参加したいと思う」という問いに対し、2割程度が「非常に思う」「思う」と回答した。ヤンバル地域へは大学から高速道路を利用して2時間弱程かかる事を考慮すれば、比較的多くの学生が参加意思を示したと考えられる。この問いと「環境改善に貢献したい」という問いを含め、活動参加意思（目標意図）に関する因果モデルを想定し、共分散構造分析を行った。この結果を図1に示す。なお、紙面の都合上詳細は割愛する。一般に、環境配慮型行動への目標意図形成には「環境リスク認知」、「対処有効性認知」、「責任帰属認知」が影響すると考えられている²⁾。ここでは沖縄県民にとってのヤンバル地域の存在価値を考慮し、「モラル・道徳心」、「心理的距離」を潜在変数として導入した。図1より、ヤンバルの自然環境が破壊されている等の認識は、その責任が自分たちにもある事を認識した上で参加意思につながる事が示された。また、自然環境を子や孫に残したいという遺贈価値（モラル・道徳心）、ヤンバル河川が好きであることや身近な存在であるといった心理的距離が影響していることも示された。

5. おわりに

本研究は都市・農村交流型河川環境保全・再生活動がどのようにすれば可能であるかを探るために、基礎的な調査分析を行ったものである。今後は、実際の行動へ至るまでの分析を行うと共に、都市と農村地域の生活者のニーズ分析及びそのマッチング分析を含めて、この活動の可能性について検討する。最後に、調査にあたり、元琉球大学の広瀬知大氏および岡本慶大氏の協力を得ました。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 宮川公男・大守隆：ソーシャル・キャピタル 現代経済社会のガバナンスの基礎、東洋経済新報社、2004
- 2) 杉浦淳吉：環境配慮の社会心理学、ナカニシヤ出版、2003